

大阪市大生活科学部 水野 弘之

目的 中高層集合住宅における窓からの墜落事故を防止するために、窓という空間の機能と使われ方の関係で、窓の安全計画について検討する。

方法 ①窓からの墜落事故の新聞記事を収集して、事故のパターンを把握する。
②大阪府の泉北ニュータウン内の中高層集合住宅において窓の安全性に関するアンケート調査(763件回収,1979年11月実施)の結果を分析する。

成果 新聞記事によれば、家具などを踏み台にして窓によじ登り墜落する事例、および窓台に直接よじ登って墜落する事例が代表的な事故のパターンである。また、窓の下の地面が植込みや土など柔らかい場合には、死を免れている事例は多く、絶大な効果がある。

泉北ニュータウンの調査からは、①子供が窓台や窓の手すりによじ登ることは容易であり、実際にそこによじ登って遊んでいる例が多いこと、②手すりの高さは子供の重心から見て低すぎるものが相当数、存在すること、③窓の手すりの下端と壁との隙間が広すぎるというウィークポイントがあること…などが判明した。

窓の機能と関連させて、窓の安全性については次のような課題を研究すべきであることが判明した。①子供はなぜ窓台に登って遊ぶことを好むか。それは高層集合住宅では、子供は屋外空間とのつながりを求めるところからではないのか。また、窓台を高くすれば子供は窓によじ登らなくなるか。②手すりを窓台に対して、より室内側に設置すると、墜落防止に効果があるが、その反面で居住者に不快な感じを与える。窓という空間の本質との関係で、手すりの設置位置、形状、高さをどうすべきか。これらの課題の解明を通じて、窓という空間が今後どのように発展するかを検討する必要がある。